

東洋英和女学院大学 卒業式式辞

卒業生の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。本学で必要な単位を修得され、こうして揃いのガウンとキャップを着用して本日のめでたい卒業式に臨んでいる皆さんの姿を前にし、その努力に心からの敬意を表し、教職員を代表してお祝い致します。また、皆さんの大学生活を支えてくださった保護者の皆様、心から祝意を申し上げます。本日、皆さんの晴れの卒業をお祝いするために、学院から増淵理事長はじめ多くの理事、来賓の方々、関係者の方々のご臨席下さっています。心よりお礼を申し上げます。

本学の卒業式は、キリスト教の礼拝形式で行っておりますが、神への祈りの中で、本学で得た学びと敬神奉仕の精神を糧に、外の世界に飛び出そうとされている卒業生の皆さんの大切な出発点になると確信しております。

さて、卒業生の皆さんにお訊きします。東洋英和女学院大学での学生生活は如何でしたか。充実していましたか。勉学や演習、実習に励みましたか。皆さんそれぞれに本学で研鑽を積み、知識やスキル、資格を身に付け、また教員・職員とたくさんの経験や体験を共有し、かけがえのない友達と友情を育みながら、良い思い出をいっぱい作ったのではないかと思います。

大学卒業は皆さんの人生において、とても大きな節目です。皆さんは今日、卒業証書・学位記を手にとられます。皆さんがこれから書く履歴書には、東洋英和女学院大学人間科学部/国際社会学部の課程を修了し、人間科学/社会科学の学士の学位を取得した、という新しい項目が加わります。本学には、皆さんより先に学び卒業していった1万6千人を超える先輩達が、日本国内はもとより世界各地で活躍しています。皆さんは、今日からその同窓生の仲間入りをします。東洋英和女学院大学で学んだこと、経験したことを十分活かして、そして本学の卒業生であることに誇りを持ち、胸を張って、実りある豊かな人生を目指して欲しいと願っています。

皆さんの大学生活は今日で終わります。授業やゼミで当たり前のようにしていた「みんなで集まる」ということが明日からはなくなります。しかし、大学を離れても、大学のことは忘れずに、卒業生として、いつまでも母校を大切に想っていただきたいと思います。母校である東洋英和女学院大学の先生方、職員との連絡を切らさないようにしてください。良いこと、嬉しいことはもちろんですが、困ったこと、悩んでいることがあったら、ぜひ連絡をし、また相談をして欲しいと思います。ラインやショートメールで良いので、近況を報告するようにしてください。私たち教職員は皆さんが卒業した後も、ずっとこの東洋英和のキャンパスでスタンバイし、応援しています。

卒業生の皆さん。明日からは、本当の意味での社会人として、それぞれが選んだ場所で、それぞれの道を歩むこととなります。四年前の高校の卒業式では、校長先生やクラス担任の先生、あるいは進路指導の先生から、「これから行く大学で、自由な時間を謳歌し、勉強や部活に一生懸命に励んでください」と言われて送り出されたと思います。四年後の今日の大学の卒業式では、「これで自由を謳歌した四年間が終わり、厳しい社会に出ていくのですよ」ということを言わなければなりません。しかし、雛が巣立って自分で餌を採りに行くように、これまでご両親や保護者の庇護のもとに育てられてきた半人前の存在から独り立ちするのですから、これほどめでたいことはなく、人生のこの門出を大いに祝福したいと思います。

さて、本日、卒業生の皆さんには、この後、大学から、お祝いとして、黄色い水仙の花（黄水仙）を卒業証書・学位記とともにお贈りします。この花の贈呈は東洋英和女学院の慣行で、東洋英和ゆかりの地であるカナダでは、黄色い水仙は、主であるキリスト教の受難と復活を祈念する時期に一面に咲き誇ることから、レント・リリー（Lent lily 受難のゆり）とも呼ばれます。皆さんは、黄水仙の花一輪に込められた「敬神奉仕」の建学の精神と東洋英和のスクールモットーを、どうか忘れないで頂きたいと思います。「敬神奉仕」が、明日から新しい世界に向かって船を漕ぎ出そうとしている東洋英和の卒業生に力強い支えになってくれるに違いありません。

今日のこの卒業式は皆さんにとって東洋英和女学院大学での最後の日ですが、同時に、次のステップへの始まり、コメントです。強い意志と高い志を持ち続けて人生を歩む皆さんのご健闘と、そして皆さんの未来に栄光があることを祈ります。どうぞ、自信を持って東洋英和女学院大学を巣立ち、そして、この大学で育てた、心の中に咲いている皆さんだけの、皆さんだけが見える大切な心の花に水をやり続けて、大きくて立派な花を咲かせてください。

最後に、本日の卒業に当たり、私から卒業生の皆さんに、ぜひ覚えておいて欲しい言葉を贈ります。それは、英和生の皆さんならご存じの、カナダの作家ルーシー・モンゴメリが書いた『赤毛のアン』の中に出てくる言葉です。『赤毛のアン』は東洋英和に学んだ村岡花子の翻訳で有名になりました。プリンス・エドワード島のグリーン・ゲイブルズで育った想像力豊かでいつも明るい主人公アン・シャーリーが、彼女に大きな転機が訪れた時に、それまで彼女を育ててくれたマリラに向けて言っている言葉です。それは「曲り角をまがったさきになにがあるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの。」(*1) という言葉です。“ I don't know what lies around the bend, but I'm going to believe that the best does. ” (*2)。誰の人生にも曲がり角は訪れます。大学を卒業して社会人という未知の領域に踏み込む時や大きな決断を迫られる時、不安は常に付きまとうと思います。その先を曲がったところがどんな景色なのか、何が見えるのか、どんなことが待ち受けているのか、どんな人と出会うか分かりません。しかし、分からないけれども、それはきっとワクワクすることだと信じる、という意味のことをモンゴメリはアン・シャーリーに言わせています。皆さんは時々この曲がり角の向こうに何があるか分からないけれど、きっと素晴らしい世界があるって思う。そう信じて生きて行くというアンのような力強い言葉を思い出して、これから皆さんが出会うであろういくつもの曲がり角を、前を向いて、愛と希望、わくわく感いっぱいに進んでいって欲しいと思います。

別れの時がきました。卒業生の皆さんに、惜しみな祝福と大きな期待、そして輝かしい未来を託して、私の式辞といたします。皆さんの未来に輝かしい実りがあらんことを。

2025年3月7日

東洋英和女学院大学
学長 星野 三喜夫

*1 村岡花子訳『赤毛のアン』新潮社文庫 516頁より引用

*2 L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* より引用